American Puritanism とその文学的遺産
——植民地時代——
Anne Bradstreet と Edward Taylor

吉 津 成 久

植民地時代のニュー・イングランドで詩を書くということはどういう意味をもっていたのであろうか？　ピューリタンの詩に対する典型的な態度としてよく引合に出されるのは，1726年にコトン・マザー (Cotton Mather) が若い聖職希望者に与えた忠告である。

「詩は有史以来，人びとから大いに求められてきたものであるから，私はここで諸君が詩について多少の心得をもつことをおすすめする必要を感じている。ある人びとは音楽に適さない心をもっていて，すべて詩の形式で書かれているものを，言葉のただ単なる遊びとして非難する。詩を書くことは，まるで，歩くかわりに踊ることよりも，もっと異常なことだといわんばかりに。また押韻は，鈴をつけたムーア人の踊のようだという。しかし私は諸君が詩をまったく解さない心をおもちになることを望んでいるわけではない。…諸君の骨の折れる勉強の最中にしばしの気晴らしに詩を楽しむのも結構なことだ。

しかしながら，諸君に是非御忠告しなければならない。のどの渇きを抑えなさい。あまり詩に心を向けて，熱烈な詩的な書物ばかり，いつも読みふけるようなことはしないように。諸君にとって主食というよりも，調味料にすぎないものにすっかり夢中になるということはすべきではない。今，ぐらついているこの国には詩がうようよする程あるが，その詩を読むことに限りを知らない病的な食欲を感じないように注意しなさい。あやしい魔力をもったキルケーの杯で酔わないようにしなさい。とくに詩の女神と言葉をかわすことで，うっかりすればこうむる危険から身を守り，諸君

の魂の純潔をそこなわないように注意しなさい。詩の女神は売女となんら変るところがないのだから。」[1]

ピューリタンは，詩に対して嫌悪感を抱いていたのではなく，むしろ詩のもっている不思議な魔力をよく理解していたからこそ，詩に対して警戒心をもっていたという方が正しい。詩作は，究極的には，詩人自らが創造の行為にたずさわることで，そこでは神に依存する姿勢はくずれ，必然的に，あるいは無意識のうちに自らにたのむ姿勢に変ってくる。詩を創る過程にこの無意識のアンチノミアニズム (antinomianism. 道徳律廃棄論。すなわち，キリスト教を信じる者は福音に示されている神の恵みの救済を受けるから道徳律から解放されると主張する信仰至上論）の生れることを，とくに「ぐらついている」当時の状況を察しながらコトン・マザーは恐れていた。マサチューセッツ植民地は，1630年代，とくに1636年から1637年にかけて，アン・ハッチンソン (Anne Hutchinson) 追放につながるアンチノミアニズムの異端思想で，神学上の論争は，政治論争に発展し，植民地の秩序は大いにぐらついた。カルヴィンの予定説を遵守するマサチューセッツの指導者が，アン・ハッチンソンの追放や，クエーカー教徒の弾圧に見られるように，「自分の魂に神の霊を直接受けた」という霊感主義者対策に苦慮した理由はあった。マサチューセッツの会衆主義は「見える聖徒」(Visible Saints) を主張し，人間が救われているかどうかは，自分の心の中で主観的に確かめられるだけでなく，それは外部から客観的に見分けのつくものでなければならないとした。しかしこの「見える聖徒」という考えには困難がつきまとう。カルヴィンの予定説によれば，人間の救いと罪の呪いは，神の絶対意志によるもので，人間によっては，自分からも他人からも確められないし，「見える聖徒」のみの集団は作れないし，外部から見分けのつくような規準で計れない，という反論である。この立場が霊感主義者たちの叫びとなってあらわれた。[2]

こういうわけで，コトン・マザーが将来の指導者たる若い聖職希望者のために，過去の悪例をふまえ，霊感主義者の思想と詩作のもつ創造的な意味あいをパラレルに置いて，秩序のたてなおしを配慮していることは察し

がつく。

アメリカが産んだ最初の詩人アン・ブラッドストリート (Anne Bradstreet, 1612～1672) の最初の詩集が，1650年，ロンドンで，『アメリカに最近出現した第十詩神』(*The Tenth Muse Lately Sprung Up in America*)という表題がついて発行された。彼女は，自作の詩を発行する意図など毛頭もっていなかったのであるが，彼女を尊敬する義弟が彼女の知らぬ間にその原稿をイギリスに持ち去って出版してしまったのである。彼女は，自分がかのギリシャの九女神の仲間にひきあげられているのを知って驚きもし，また当惑した。後にコトン・マザーが，「とくに詩の女神と言葉をかわすことで，うっかりすればこうむる危険から身を守り，諸君の魂の純潔をそこなわないように注意しなさい。詩の女神は売女となんら変るところがないのだから。」(前掲引用) と警告した，当の「女神」に称せられることは，彼女を妙な立場においこむことになりかねなかった。なぜならば，コトン・マザーの一文は，18世紀初頭に発表されたものとはいえ，このピューリタンの詩に対する態度は，アン・ブラッドストリートの時代においてもあてはまったし，彼女の父トーマス・ダドリー (Thomas Dudley) および夫サイモン・ブラッドストリート (Simon Bradstreet) は，ともに，有能な行政官としてマサチューセッツ植民地の指導的役割を果していたからである。とくに父トーマス・ダドリーは，ジョン・ウインスロップ (John Winthrop) とともに，アン・ハッチソン追放の立役者であった。

アン・ブラッドストリートは，詩を書くこと，とくに女が詩を書くことに対するピューリタン社会の反応と，それに対する彼女の反抗を，『序詩』(*The Prologue to The Tenth Muse*) の中で次のように吐露している。

I am obnoxious to each carping tongue
Who says my hand a needle better fits,
A Poets pen all scorn I should thus wrong,
For such despite they cast on Female wits:
If what I do prove well, it won't advance,
They'l say it's stoln, or else it was by chance.

粗探し的な非難を私は受ける，
私の手は，針仕事にふさわしいとそれはいう，
私が詩作にふけるのは詩人のペンを侮辱することだ，と皆がいう，
私がうまくもくろんでも進歩はしまいと，
彼らが女に投げかける例の侮蔑の故に，
人はいう，私の詩は盗作だと，そう言われなければせめてもの幸運。

But sure the Antique Greeks were far more mild
Else of our Sexe, why feigned they those Nine[4]
And poesy made, *Calliope's* own Child;
So 'mongst the rest they placed the Arts Divine,
But this weak knot, they will full soon untie,
The Greeks did nought, but play the fools and lye.

だが，それに比べて古代のギリシャ人は女に寛大だった。
ともかくそうでなかったら，彼らは女の形で九人のミューズを作り，
詩をカリオーペの子とすることもなかったろうに。
こうして，彼らは芸術の女神を他の神々の間においた。
だがこの僅かな絆も，すぐにほどけてしまうだろう，
ギリシャ人のしたことは，ただ愚行を演じ嘘をついただけ。

Let Greeks be Greeks, and women what they are
Men have precedency and still excell,
It is but vain unjustly to wage warre;
Men can do best, and women know it well
Preheminence in all and each is yours;
Yet grant some small acknowledgement of ours.

ギリシャ人はギリシャ人，女性は今のままの状態で，
男は支配しいつも卓越していて構いはしない。
不当にもそれに戦いをいどんでも，無駄にすぎない，
男には最上の能力があり，女はそれをよく知っている。
すべての秀れたものはあなたがた男のもの。
だがわれわれ女の秀れた点も少しは認めて欲しいもの。

女性が文学に親しむこと，詩を書くということに対するもっとも一般的な風潮は，ジョン・ウインスロップの *Journal*（1645年4月13日付）に書かれた一つのエピソードが語ってくれる。

「コネティカット植民地のハートフォードの総督ホプキンズ氏が妻を伴ってボストンにやってきた。（妻は信心深い婦人で，特別な才能をもった人である。）この婦人は，理解力と理性を失うという悲しい病気になってしまった。この病気は，彼女が読み書きに全身を打ちこみ，多くの本を書いたことから，数年の間につのってきたものであった。もし彼女が普通の女の仕事である家事などの仕事をするだけで，それ以外の，女性よりも知的に頑丈な男性に適するような事柄に首をつっこまなかったならば正気を保ち，神が彼女に定め給うた役割を果すことにより，有効かつ立派に，その精神をみがくことができたかもしれなかったからである。」(3)

ジョン・ウインスロップやコトン・マザー等当時の指導者が恐れていた通り，アン・ブラッドストリートの詩作には，アン・ハッチンソンと等質の異端思想に向う要素が充分あった。とくに，ロージャー・ウイリアムス (Roger Williams) およびアン・ハッチンソン追放事件のさなかで神学および政治上の紛争がさかんであった1636年から1637年の間に書かれたと思われる『四元数詩』(*Quaternions*) は，その点で注目に値しよう。そのうち，最初の *The Four Elements* では，四元の各々が，如何に自己が最強で，最も貴く，最もすぐれているかを吹聴し，必要ならば他者を犠牲にしてもはばからない。

Who the most good could shew, & who most rage
For to declare, themselves they all ingage;
And in due order each her turne should speake,
But enmity, this amity did breake:
All would be chief, and all scorn'd to be under,
Whence issu'd raines, and winds, lightning and thunder...

誰が最もすぐれているか，誰が最もすぐれた熱情を

表わしうるか，これらのことに彼らは皆夢中であった，
お定りの順序にしたがって，かわるがわる発言した，
しかし敵意のために，この親善関係は破れた，
すべてが主人になりたいと願い，すべてが支配されることをきらった，
そのため，雨が，風が，稲妻，雷鳴が起った。

二番目の *The Four Humours* では，やはり，四気質の各々が，自分が主人でありたいと願い，他者を傷つけてもその卓越さを主張したがる。ここにある激しい憎しみあいは，J. K. Piercy もいうように，ある特定のエピソード，ある特定の人物を心に描いて書かれたのではなかろうか？　彼女は，当時，Puritan Orthodoxy に対する疑念を抱いていた。次は，その一例である。

Why may not the Popish Religion bee the right? They have the same God, the same Christ, the same word: They only enterprett it one way, wee another.

どうしてカトリック教が正しくないのか？　彼らとて同じ神，同じキリスト，同じ言葉を持っているではないか。ただ解釈の上で，彼らとわれわれは異っているにすぎない。

アン・ブラッドストリートの反抗や疑念を考えると，彼女は1636年に追放されたR・ウイリアムズ，および翌年追放されたA・ハッチンソンに対し同情を抱いていたのではないか？　この時期に父T・ダドリーはマサチューセッツの副総督，夫はその助手をつとめていた。二人の異端者の扱いに反対するような意見をもしも明白に表明したら，その当時としては何人といえども，危険がふりかかったであろう。ましてや副総督の娘がそんなことをしたら家の恥となっていたであろう。だが，父が重要にからんでいるこの追放事件，the Christian Brotherhood がさかんに説かれていたにも

かかわらず，神に最も身近にいる人間たちがひき起している派閥や権力争いが彼女の胸を痛め，不信の念をいっそうかりたてたことはまちがいなかろう。

四気質 (Four Humours) は擬人化され，お互いを「姉妹」と呼んでいる。Choler は怒りっぽい性質で，他の姉妹である Humours を，きたない言葉で愚弄している。彼らは皆 milksops（腰抜け）であり，Blood は他の二人分の価値はあるが，Sister Ruddy（めめしい Ruddy. ruddy は bloody の遠曲的代用語）である。Choler はまた Melancholy についても同様に軽蔑的な性格づけをする。

> Then here's our sad black Sister, worse then you,
> She'l neither say, she wil, nor wil she doe:
> But Peevish, Male content musing she sits,
> And by misprisons, like to loose her wits,...
>
> それからここにひどく陰険なわれらの姉妹がいる，お前より悪い。
> 彼女は，ものもいわず，行動もしない，
> だが片意地で，悪意を秘めてじっと考えこんでいるばかり，
> 怠慢によって，彼女は正気を失いがちだ…

'misprison' は，辞書のうえでは，「公務員の職務怠慢」という意味で，詩人の心には，現実社会における，ある公僕のイメジがあるのか？　このあと，Humours どうしの罵りあいがつづくが，最後に Flegm がこの論争の結末をつける。彼女は，人間の中で一番高貴な部分，すなわち 'the Brain and the Soul' は自分のものだと主張し，彼女はそれにふさわしい落着いた理性でもって論ずる。彼女は，お互いの違いを調和させ，相和して働こうと提案する。おたがいを罵倒しあう Humours が，植民地全体を掌握する任努を帯びた人物たちのイメイジだとすれば，最後に Unity を主張して調停するのが Flegm であることは興味深い。Flegm は人間の四つの年代にあてはめるならば，Childhood にあたり，Anne Bradstreet の，父の世界に対する憂慮，批判が隠微な形であらわれていることになる。

J・ウインスロップの *Journal* などの客観的資料をとおしても，われわれは追放事件をめぐっての植民地における教会と国家の密接な関連を具体的に知ることができるが，大下尚一氏は次のように解説する。

「彼らが遵守した契約神学の中で，恩恵の契約は回心の体験として把握され，業の契約は救われた者の義務，すなわち道徳的要請として認識される。そのどちらか一方だけが重視されてもピューリタンの契約理念は均衡を失うのであるが，植民地建設という具体的な使命を帯びた指導者たちは，住民に業の契約を強調しがちであった。その結果，業の契約に励む者は救いを得ている証拠だと見なされる傾向が生まれた。しかしまた，荒野の中の開拓地で苦難の日々を送っている住民には，恩恵に浴しているという霊的な実感を与えてくれる教えは魅力的であった。ここに，A・ハッチンソンが恩恵の契約を重視し，牧師たちは業の契約しか説いていないと非難の声をあげたとき，多くの人びとがその虜になった理由がある。」(4)

自身で自分の詩をつまらないものだと認めていたにもかかわらず，アン・ブラッドストリートはもう一つの四元詩 (*quaternions*) を書いた。『四王国』(*The Four Monarchies*) と題するこの詩は，アッシリア王国からローマ帝国に至る，韻文で書かれた歴史である。彼女は，この詩を執筆するにあたって，Sir Walter Raleigh の *The History of the World* (1614) を模範にしたらしい。事実，その詩の中で何度となく Raleigh の名を挙げているし，彼女の詩集の編者 John Harvard Ellis は，その Introduction において，彼女が Sir Walter Raleigh の言句を paraphrase しているおびただしい実例を挙げている。Sir Walter Releigh の *The History of the World* や Du Bartas の *The Divine Weeks and Workes* は，アン・ブラッドストリートばかりでなく，当時のピューリタンたちの愛読書であった。何故なら，これ

らの著作は，歴史は人類の出来事における神意のあらわれであり，政治または道徳上の真実を照らし出す光であるという信念にもとずいて書かれたからである。この傾向は，ルネッサンス以来伝統的に受けつがれてきたピューリタンの歴史観を特徴づけるものである。William Bradford の *Of Plymouth Plantation* や John Winthrop の *Journal* が証明するように，彼らは政治的重大事とともに，些細な日々の出来事を記して，そこに摂理の働きを見ようとした。

Sir Walter Raleigh も Du Bartas も各々の物語を，当時の歴史著述家たちの慣例にしたがって天地創造からはじめている。ピューリタンたちにとっても，歴史におけるもっとも重要な章は，天地創造，Adam の堕落であった。だが，アン・ブラッドストリートの *The Four Monarchies* は，天地創造ではなく，アッシリア王国からはじまっている。彼女は何故天地創造からはじめて，キリスト教時代にまでその歴史をつづらなかったのか？彼女は，Du Bartas が死によって中断したところからはじめているのである。

J.K. Piercy は *The History of the World* と *The Four Monarchies* からの引用を実例として，二人の著者の違いを説明しており，A・ブラッドストリートの詩句は人物の行為を扱っており，Raleigh が範を示すところの道徳的教訓にまで広がらないことを証明している。(5) こうしたアン・ブラッドストリートのオーソドックスな歴史観の欠如あるいは省略は，当時の多くのピューリタンたちが Adam の堕落と神の救済が，厳しい試錬を与える生活環境によってますます深まり，業の契約を重んじていた時代においては，奇異な感じがする。*The Four Ages of Man* の *Childhood* において，彼女は「Adam の末裔」という観念を導入しているが，その性格描写は，あまりにもリアリスティックに描かれ，聖書からの発想よりはむしろ彼女自身の実体験からうまれたという印象を受ける。また，彼女の「神」は慈愛に満ちた神であり，どの詩をさがしても，あの怒れる神のイメイジはあらわれてこない。Puritan Orthodoxy の中心に生活しながら，彼女は，業の契約よりも恩恵の契約に傾いており，そこにアン・ハッチンソンと相通ず

るものがあったのではないかと思われる。

アン・ブラッドストリートよりやや後期の詩人エドワード・テイラー (Edward Taylor, 1642–1729) も，アメリカン・ピューリタンとしては例外的な精神的特質をもっている。彼の詩においては，人間は，その肉体の咎によって天使と獣の中間に甘んじる存在ではない。天使より下位に属するどころか，人間は如何なる被造物よりも神にもっとも近い存在であり，その本性は，三位一体の中に確立されている。

I'll claim my right: give place ye angels bright.
  Ye further from the Godhead stand than I.
My nature is your Lord, and doth unite
  Better than yours unto the Deity.

我は己が権利を主張する。席を譲れ，輝く天使たちよ。
  汝は，我よりも神から遠き者。
わが本性は汝の主なり，神との結びつきは
  汝の比にあらず。

この信念は，神と人間の結婚という形態をとってあらわれ，法悦の境地にひたる詩人の愛の歌が展開される。この結婚が人間の意図によるものであれば，それは最大の冒瀆であう。だがそれは神意にもとずくものである。この結婚は地上の結婚と同様，両者の相互義務を必要とする。テイラーは，人が神に依存するのと同程度に神が人に依存すること，神が人を必要とされることを主張する。さらに，神なる花婿は，その力を人なる花嫁と分ちあう。その真理，恩寵，生命(いのち)，知恵は，彼女に伝達される。また，この結婚は，人の場合と同様，the consummation of a marriage（結婚の完了。床入り）を必要とする。実際，最高の恋人たるキリスト (the Lover of Lovers) に捧げるテイラーの愛の歌には，驚くほど官能的なイメージがあふれている。人の魂（花嫁）は，「法悦境にひたらせてくれるみつばさ」("the wings of extasies") たるキリスト（花婿）の腕に抱かれ，新しき生命

を孕む。霊の再生，新しき人の誕生 (the birth of the New Man) である。pregnancy のイメージは，「箱」のイメージ——a box, a cabinet, a tabernacle——といった一般的なものから，より暗示的な，液体の満ちた「容器」のイメージ——a bowl, a vessel, a vial——など千差万別である。

O let thy lovely streams of love distill
  Upon myself and spout their spirits pure
Into my vial, and my vessel fill
  With liveliness.....

あゝ，あなたのすばらしい愛液を
  私のうえにしたたらせ，その清らかな霊（生命の液）を
私の壷の中に噴出し，わが容器を
  生気に満たしてください……

Christ=Man's Bridegroom のイメージは，アン・ブラッドストリートの場合も顕著である。彼女は六十年の生涯を閉じる三年前，すなわち1669年に書いた『疲れはてし巡礼，今休息せんとす』(*As Weary Pilgrim, now at Rest*)の最後の箇所で叫んでいる。

Oh how I long to be at rest
And soare on high among the blest.
This body shall in silence sleep
Mine eyes no more shall ever weep
No fainting fits shall me assaile
Nor grinding paines my body fraile
With cares and fears ne'r cumbred be
Nor losses know, nor sorrowes see
What tho my flesh shall there consume
It is the bed Christ did perfume
And when a few years shall be gone
This mortall shall be cloth'd upon

A Corrupt Carcasse downe it lyes
A glorious body it shall rise
In weaknes and dishonour sowne
In power 'tis rais'd by Christ alone
Then soule and body shall unite
And of their maker have the sight
Such lasting joyes shall there behold
As eare ne'r heard nor tongue e'er told
Lord make me ready for that day
Then Come deare bridgrome Come away.

あゝ，わたしはどんなに休息したいと思い，
天高く舞いあがって神に召された人々と一緒になりたいことか。
この肉体は静かにねむり，
わたしの目はもはや涙を流すこともないだろう，
気を失うような痛みの発作が襲ってくることもないし，
身を引裂くような痛みがこの弱いわたしの体を責めることもない，
心配や恐れで悩まされることもない，
愛するものを失ったり，悲しみを経験することもない，
わたしの体は，そこで朽ちはてようとも，
キリストが芳香でベッドを満たして下さり，
数年過ぎれば，
この死骸はやさしくくるまれて，
朽ちたしかばねはそのまま横たわっていても，
栄光を受けた肉体は天にのぼってゆくだろう。
たとえ，弱さと不名誉のうちに種まかれた身であったとしても，
ただキリストによってのみ，力をえて天にのぼることができる，
そこで，魂と肉体は合体し，
そして，造り主に会えるだろう，
そこでは永遠のよろこびを味わうだろう，
人の耳が聞いたこともなければ，舌が話したこともないような。
主よ，願わくばその日にそなえて準備をさせ給え，
その時は，愛(いと)しの花婿さん，天から迎えに来てくださいね。

この神（キリスト）＝花婿のイメージ・パターンは，太陽の栄光とその

神性("Soul of this world, this Universes Eye") に受けつがれる。『観照集』(*Contemplations*) の Stanza 5 において，太陽（花婿）と大地（花嫁）の結婚 (the consummation of a marriage)——sex と breed のイメージ，対立と融合による宇宙の無限な輪廻転生，永遠なる Time の観念がある。

Thou as a Bridegroom from thy Chamber rushes,
And as a strong man, joyes to run a race,
The morn doth usher thee, with smiles and blushes,
The Earth reflects her glances in thy face.
Birds, insects, Animals with Vegative,
Thy heart from death and dulness doth revive:
And in the darksome womb of fruitful nature dive.

あなたは花婿のごとく，私室からとびだし，
力強い若者のごとく，喜び勇んで走り出す，
朝は，微笑を浮べ，顔を赤らめながらあなたを迎えいれる，
大地はあなたの顔にはじらいの視線を送り，
鳥や，虫や，動植物は，
あなたの熱愛によって死と沈滞から生きかえり，
その愛は，多産な自然の，ほの暗き子宮の中にそそぎこまれる。

さらに，この太陽＝花婿のイメージは，ブラッドストリートの夫サイモンに重ねられる。夫が公用でイギリスへ行っている間の書簡体の詩 *A Letter to Her Husband, Absent upon Publick Employment* で，彼女は夫 (my Sun) に呼びかける。

I wish my Sun may never set, but burn
Within the Cancer of my glowing breast,
The welcome house of him my dearest guest.
Where ever, ever stay, and go not thence,
Till natures sad decree shall call thee hence;
Flesh of thy flesh, bone of thy bone,

I here, thou there, yet both but one.

私の太陽よ，二度と沈まないで，
私のほてった胸の巨蟹宮の中で燃えてほしい，
そこは，私の最愛のお客さまである彼を迎え入れる館なのです。
そこに，いつまでも，いつまでも居て，どこへも行かないで，
自然の悲しい定めが，あなたをそこから呼び出すまでは。
あなたの肉の肉，あなたの骨の骨，
私はこちら，あなたはあちら，でも二人は一つにすぎないわ。

神（キリスト）—太陽—夫というこのパラレルな関係は，罪の烙印を押された人間という観念がつきまとうピューリタン社会の壁にぶつかりながらも，神（天上）と人間（地上）の結婚によって永遠に保証された恩恵の契約を限りある人生のよすがとする詩人の胸の内をあらわしている。一方，夫を詠んだブラッドストリートの詩は，ピューリタン社会における男女関係の最も典型的な姿を彷彿とさせる。1650年までに書かれた初期の詩に見られたような夫を含めた男性社会に対する激しい反抗，疑念は，熱烈で真摯な夫への愛にかわっている。大下尚一氏によると，ピューリタンは一般に，愛したゆえに結婚したのではなくて結婚したゆえに愛した。これはピューリタンの契約的結婚観によって裏づけされたもので，かれらは，人間がいつくしむ一切のものに優越する神への忠誠を強調し，結婚は，神のもとにおける共同の事業となった。したがって妻が夫を愛する理由は，第一に，夫が神を愛しているからであり，第二に妻である自分を愛しているからであった。また，ニュー・イングランドにおけるピューターン社会は，性を不当に抑圧した灰色の社会ではなく，そこでは独身を守ることが聖者の姿ではなく，彼らの契約的結婚観は，肉体関係に対しても積極的態度を与え，たとえば婚礼の床に近づかないことを理想として結婚した夫婦は，過ちの例とされた。(6)

アン・ブラッドストリートの夫への愛は，ピューリタン社会のこうした特徴をもっとも象徴的にあらわしたものといえようが，反面，その詩のあ

いまにむきだしの passion が見られるのも事実である。初期の詩に見られる「対立」の観念は，後期の詩においては，「隔合」の観念に焦点が移動している。だが，いずれの場合にも目立つことは，その passion の激しさである。

アン・ブラッドストリートは，Giordano Bruno (1548?～1600) を読んだにちがいない。彼の「対立」の思想，つまり対立しあうものは，その相剋を通じてひとつのものに融合され保たれる，という概念で，それは，彼の「宇宙無限論」と連続する。彼にとって，宇宙は無限であり，一切のものはその中で合成解体をくり返す。したがって，生命の輪廻もありうることを彼は主張する。アン・ブラッドストリートの『四元数詩』(*Quaternions*) は，四つの円環（すなわち *The Four Elements, The Four Humours, The Four Ages, The Four Seasons*) から成り，さらにその円環の中には，それぞれ四つの小さな円環がある。循環する輪のすべての時点は，おのおのが独立した中心であり，その一点にあらゆる過去と未来が集り，この普遍的な一点に個々の生が連なり，個々は原型であり，同時に原型は個々となる。つまり，個別と普遍の合体である。

だがそこでは，あらゆる事物が対立しながら循環し，四つの周期を経て回帰する。その円環すべてが人間の生の営みにつながり，歴史の法則を構成する。堕落（死）は，他の形をとって転生（蘇生）するが，その条件は対立である。対立しあうものは，その相剋を通じてひとつのものに融合され保たれる。その対立のもっとも根本的なものは性の対立，戦い（＝融合，すなわち男女の性のいとなみ）→子孫の誕生である。

くりかえしていうが，アン・ブラッドストリートの激しさは，「対立」「融合」いずれの場合にも異常に目立っている。また，後期の詩においては，「融合」の観念に強勢が置かれているが，その直後に時折「対立」の観念が顔をのぞかせている。それはとりもなおさず，Puritan Orthodoxy の壁の中にあって，それから精神的離脱をはかりながらも妥協を余儀なくされる詩人のジレンマであり，soul と body の葛藤がうずまいているといえよう。

長男 Samuel の長子 Elizabeth（一歳半で死亡）に捧げる elegy の第2 stanza で，ブラッドストリートは歌う，

By nature Trees do rot when they are grown.
And Plumbs and Apples throughly ripe do fall,
And Corn and grass are in their season mown,
And time brings down what is both strong and tall.
But plants new set to be eradicate,
And buds new blown, to have so short a date,
Is by his hand alone that guides nature and fate.

木というものは，成長すれば，自然に枯れるもの。
プラムもリンゴも，熟しきってしまえば，落ちるもの，
穀物も草も，盛りの時に刈りとられるもの，
時は，強く高いものを亡ぼすもの。
新しい苗はやがて根こそぎ取られるために植えられ，
はじめて開いたつぼみもほんのしばしの命を保つだけ，
だが，それもこれもただ，自然と運命を司る方の手によるもの。

1～4行までは， Providence, 時の暴虐に対する諦念があらわされているが，But ではじまる5～6行は，神意に対する激しい反発が顔をのぞかせる。だが，最後の行では造物主への Conformity によって己れのわがままをぬぐいさろうとする。

あいつづく身内の不幸な死の際中に，ブラッドストリート自身も大きな不幸に襲われる。それは，1666年7月10日に起った火事のために住みなれた家屋が全焼し，幸せなこの世のおもい出を秘めた品物をすべて灰にしてしまったことである。

And, when I could no longer look,
I blest his Name that gave and took,
That layd my goods now in the dust:

Yes so it was, and so 'twas just.
It was his own: it was not mine;
Far be it that I should repine.

He might of All justly bereft,
But yet sufficient for us left.
When by the Ruines oft I past,
My sorrowing eyes aside did cast,
And here and there the places spye
Where oft I sate, and long did lye.

Here stood that Trunk, and there that chest;
There lay that store I counted best:
My pleasant things in ashes lye,
And them behold no more shall I.
Under they roof no guest shall sitt,
Nor at thy Table eat a bitt.

No pleasant tale shall 'ere be told,
Nor things recounted done of old.
No Candle 'ere shall shine in Thee,
Nor bridegroom's voice ere heard shall bee.
In silence ever shalt hou lye;
Adeiu, Adeiu; All's vanity.

Then streight I'gin my heart to chide,
And did thy wealth on earth abide?
Didst fix thy hope on mouldring dust,
The arm of flesh didst make thy trust?
Raise up thy thoughts above the skye
That dunghill mists away may flie.

Thou hast an house on high erect,
Fram'd by that mighty Architect,
With glory richly furnished,
Stands permanent though this bee fled.
It's purchased, and paid for too

By him who hath enough to doe.

A Prise so vast as is unknown,
Yet, by his Gift, is made thine own.
Ther's wealth enough, I need no more;
Farewell my Pelf, farewell my Store.
The world no longer let me Love,
My hope and Treasure lyes Above.

わたしがもう見るにしのびなくなった時，
わたしは，与えそして取りあげられた方の御名を賛美した，
わたしの持物をこうして塵に帰してしまわれた方を。
そうだ，これが本当なのだ，これでよかったのだ。
それは，もともとあの方のもの，わたしのものではなかったのだ。
ぐちをこぼすなど決してすまい。

あの方はすべてを奪われてもよかったのに，
わたしたちに充分なものを残してくださった。
わたしが焼け跡を通りすぎる時，
わたしの悲しみに沈んだ目はちらと向けられる，
ここ，かしこと，
わたしがよく座ったところ，ながく横になっていた所など。

ここにはあのトランクがあった，あそこにはあのタンスが。
向うには，わたしがもっとも良いものとしてしまっておいたものが，
わたしのたのしみは灰になっている，
もう二度と見ることはない。
その屋根の下でお客が座ることもないし，
そのテーブルについて食事をすることもない。

楽しい話を聞くこともないし，
昔話が語られることもない。
ろうそくの火が，おまえの中で輝やくこともないし，
花婿の声を２度と聞くことはないだろう。
永遠に沈黙の中にお前はよこたわるのだろう。
さようなら，さようなら，すべては空しい。

やがてわたしは，しっかりしろと，自分を叱りつけはじめる，
おまえの富は地上に留まっていたのか？
おまえの希望は，朽ちはてる塵に固着していたのか？
肉の力をおまえは信用していたのか？
おまえのおもいをあの空のさらに上に向けて，
糞土のごときもやを飛散させてしまえと。

おまえはあの高い所に建てられた家をもっている，
あの全能の建築家によって建てられた，
それは栄光で豪華にしつらえられ，
この世の住家は消えようとも，それは永遠に建っている。
それは買われ，また支払われた，
その能力が充分ある方によって。

その報いははかりしれないほど大きい，
だが，あの方のおかげでそれはおまえのものになる。
そこには富が充分あり，わたしはそれ以上は要らない。
さようなら，わたしの金銭，さようなら，わたしのたくわえ，
この世をもはや愛する気にはなれない，
わたしの希望と宝は天にある。

アン・ブラッドストリートは，くりかえし襲ってくる病いの発作のたびに死への憧れを抱いたにもかかわらず，反面，生への執着を相当にもっていた。その強い生命力が，あのような時代の趨勢との葛藤や，六十才まで生きのびさせる原動力となったのであろう。上記引用の詩は，彼女の家がいかに優雅で住心地がよかったかをわれわれに理解させると同時に，彼女が自分を責めて "far be it that I should repine," という時，とりもなおさず彼女は repine しているのであり，あの England 時代からの幸せがいっぱいつまったトランクの灰塵の前で呆然として立ちつくしているのである。しかも，洗錬された教養を備えた客に囲まれてホステス役をつとめていたあの生活も，また息子 Simon の幸せな結婚式のおもいでの品もすべて灰になってしまった。

幼い孫の死を詠んだ elegy にも見られるパターンがここにも見られる。

すなわち，自己の本来の故郷は天の住家であるという声と，断ち切れぬ地上の宝への執着心，その心の揺れは，天上の宝への conformity によって一応決着がつけられる。恩恵の契約によって保障されたように，有限の世界にありながら天と地の結婚による生命の永遠化への夢が，これほどまでに鮮明に，また激しく表わされていることは，当時の puritan 社会にあってはめずらしいことであり，またその反面，puritan 社会の壁が立ちふさがっていたからこそこの激しさがうまれてきたという逆説も成り立つであろう。

エドワード・テイラーは，詩作を宗教的義務と考えた。『瞑想詩』(*Meditations*) の中で，彼は，キリストが人間を天使の上位に引きあげて下さったこと，そのため，人は，絶えず他の被造物と同様に神の栄光を歌いつづける義務がある，とのべている。この意味で，テイラーの考えは，『観照集』(*Contemplations*) におけるアン・ブラッドストリートと一致する。たとえばテイラーの『瞑想詩』1.22とブラッドストリートの『観照集』Stanza 9を比較すればそれは明白である。

But shall the bird sing forth thy praise, and shall
The little bee present her thankful hum?
But I who see thy shining glory fall
Before mine eyes, stand blockish, dull, and dumb?

鳥があなたを賛美して歌い，
小さなみつばちまでがそれなりに感謝の歌を献上するというのか？
だが，わたしは，あなたの輝やかしき栄光が，
眼前に降りかかるのを見ておりながら，木塊のように，愚鈍で，ただ
　黙して立っているというのか？

I heard the merry grashopper then sing,
The black clad Cricket, bear a second part,
They kept one tune, and plaid on the same string,
Seeming to glory in their little Art.

Shall Creatures abject, thus their voices raise?
And in their kind resound their makers praise:
Whilst I as mute, can warble forth no higher layes.

その時わたしは，きりぎりすの陽気な声を聞いた，
黒装束のこおろぎが，第二声部をうけもち，
かれらは一つの旋律を同じ弦で演奏した，
その粗末な芸術にほこりをもっているかのように。
卑しき生物が，かくも声高らかに歌いあげようというのか？
彼らは彼らなりに造り主をほめたたえる，
それにひきかえこのわたしは唖も同然，かれらほどにも高らかに歌う
　こともできない。

テイラーによれば，真の詩人とは，その魂（花嫁）がキリスト（花婿）との結婚によって愛液 (lovely streams of love, their spirits pure) を受け，New Man として再生した者である。

ところで，テイラーは，自己の相続者たちに対して，自分の作品を絶対に発行してはならぬと命じた。事実，1937年，イエール大学の Dr. Thomas H. Johnson がテイラーの詩集を発行するまで，2世紀以上もの間，それは原稿のままで人の目にふれずにいたわけである。彼の意図を明かす根拠は何一つ残されていないので，憶測するしかしかたがないが，アン・ブラッドストリートに出版の意図がなかったのと同様に，彼の場合にも Puritanism の影が隠微な形でおおっていたのではあるまいか？

1642年英国 Leicestershire で，厳格な dissenters である両親のもとに生れたエドワード・テイラーは，1668年，26歳の時，王政復古による非国教徒弾圧を逃れてアメリカに渡り，ケンブリッジに編入学して学位を取得し，やがて開拓まもない辺境の地コネティカットのウエストフィールド (Westfield) という田舎にある教会の正牧師となる。神権政治の中心地ボストンから100マイル西方にあるこの地で，彼は，己が詩想を自由に駆使することができたであろう。だが一方，牧師という立場上，たとえば，神との私的な対話であり， the Lord's Supper におけるキリストの体と血を受

ける霊の準備として書きつづった217の『瞑想詩』(*Meditations Preparatory*) を公けにすることは，彼にとって神への冒瀆と思われたであろう。このことは，14のシリーズから成る説教集『キリスト伝』(Christographia) を彼が出版する意図をもっていたということからも証明できよう。

テイラーは，恐しく厳格なピューリタンである両親のもとで育ったらしい。幾度となく彼は，両親のピューリタン的頑迷さについて語っている。彼らがキリスト教徒としての慈愛の心を決して持たなかったこと，嘘をついて母親にこっぴどく叱られ，彼女が語った地獄絵図は30歳なかばになった今もなお脳裡に鮮明に焼付いていると語っている。しかし，テイラーの世界には，硫黄の悪臭も，燃えつづける地獄の業火も無い。それどころか，栄光，誇り，官能的でエロティックな歓喜，尊大ともいえる自信が随所に見られる。

アン・ブラッドストリートとエドワード・テイラーが，もしも百年あるいは二百年後のアメリカに存在していたならば，彼らはその想像の翼をより大きくより自由にひろげていたことであろう。だが，一面，荒野に神の国を建設しようという情熱の中に在ってこそ，彼らの情熱が産んだ作品は強烈な光彩をはなっているといえよう。

註

(1) Perry Miller and Thomas H. Johnson, eds., *The Puritans*, (New York: American Book Co., 1968), pp. 684–6.

(2) 大下尙一篇，講座アメリカの文化 I 『ピューリタズムとアメリカ——伝統と伝統への反逆——』中，秋山健著「ピューリタンの文学」，(南雲堂，1969)，pp. 193—4。

(3) Perry Miller ed., *The American Puritans*, (New York: Anchor Books, Doubleday & Co., Inc., 1956), pp. 44–45.

(4) 大下尙一解説『ピューリタニズム』(アメリカ古典文庫—15，研究社，1976)，pp. 20～21。

(5) Josephine K. Piercy: *Anne Bradstreet*, Sylvia E. Bowman, ed., *Twayne's*

United States Authors Series, (New York: Twayne Publishing Inc., 1965), pp. 30–31.

(6) 大下尙一編『ピューリタニズムとアメリカ』pp. 11～12。

なお，作品のテキストは，次のものを参照した。

Ellis, John Harvard ed., *The Works of Anne Bradstreet, in Prose andVerse* (Reprint), (Mass., Gloucester; Peter Smith, 1932)

Meserole, Harrison T., ed., *Seventeenth-Century American Poetry*, (New York: Anchor Books, Doubleday & Co., Inc., 1968)

Miller, Perry ed., *Major Writers of America I*, (New York: Harcourt, Brace & World, Inc., 1962)